

しい二次的な扇状地を作っている。その日は白川の扇状地の扇頂に近い県立の種畜場を見学した。いや見物した。こゝでは他県からの優秀種の家畜を集めそれらに同じ飼量を与えた結果から何県からのものが最もこの地に良く育つかという実験をしているという事であつた。それをうっかり一頭の豚にだけ紙を食べさせてしまったSさん。あとで気がついて他の豚にもやつて来ようかしらとしきりに心配していた。

動物というものは種類によって性質が実に違う。山羊や牛、馬の様に異様な恰好の女性が十人以上よつてたかつても、しらん顔で身動き一つせずそばを向いているものがあるかと思うと、豚の様に体を柵からのりださんばかりにして鼻をつきだし、寝糞をふりまくものもある。我々はあの鼻をまともにみせつけられてげんぱりしたが、先生は多いに食欲をそそられたそうである。

その晩は吉田先生ともう一人メンバーが加わり話に花がさいた。そこででた話題を一つごひろうすると、わが地理科に是非巡検用のマイクロバスを備えたい、という事である。学校からの援助は見込みがないから、我々の力で買うとすると、卒業生を含めて一人頭いくらだせばよいか、一人2,000円としても30万円は集る等と盛んに皮算用を試みた。それにしても、本当に一台ほしいものである。乗用車でなくバスなら、彼とのドライブにちょっと拝借しよう等という不心得者は現われないうし。

最後の日は沼田まで北上、沼田盆地は旧くは利根川が赤城の火山岩屑の堆積によりせきとめられ湖水を形成していたという所であるが、赤城山の溶岩の下に湖成堆積物のみつかるところもあつて必ずしもそれが定説となつてはいない。という事である。

さてその日は先生のご都合で早く解散という事になつた。いつもの巡検なら必ず他へ足をのばしてゆく者があるのに今回は全員がより道せず家に戻つた。これというのも五日後に追つた鷹ろく程沢山の提出物のせいなのである。

山形—秋田 (昭和36年7月2日～5日)

3年 (昭和35年度生)

この巡検は渡辺先生のご指導のもとに夏休みに入ったばかりの7月2日、山形を皮切りにおこなわれましたが、オノ日目は山形大、長井先生に案内していただき、馬見ヶ崎扇状地の扇頂に位置し古くから城下町として栄えてい

る山形市の市内および市東部の扇状地見学。2日目は山形から秋田に向い、時間の都合で下車出来なかつた象潟の泥流地形を重中から観察し、夕方秋田宿舎では秋田大の工藤先生から秋田市と男鹿半島についての講義をうけ、3日目は現在着々とすすめられている入郎潟の干拓事業の状態を見、さらに男鹿半島の独特な山体で知られている寒風山に登り、その山体についての説明を伺ふ。4日目にはマールで名高い一の目潟。この目潟、戸賀潟を見学するという非常に多種多様なものを織りこんだ巡検でした。人文地理的要素が多分に入っていて、高校で得た知識だけでは乏しく学問的な報告を書くほどには至りませんので、こゝに二、三の巡検こぼれ話というべきものをあげて私達の巡検の一端を知っていただくことにします。

〈その1〉 — 山形 — 山形大ではお昼にサクランボをご馳走になりました。明治初期士族の手によって栽培されはじめたというサクランボ、その甘い水々しい味は午前中市内を歩きまわって得た山形の印象の断片——大通りに沿うアーケード、人々にぎわうデパート、城下町の面影を残す代官屋、カギ型にまがった道路、寺内町と呼ばれる宗教集落、——それ以上私達に東京を遠くはなれた山形の地を感じさせました。このごろは旅に出ても地方の中心都市は良く発達し景観においては東京の町と大差がなくなってきました。遠くに来てもしその土地にいることを感じさせません。けれどその土地の名物の味がやはり遠くの地であることを知らせてくれるようです。

〈その2〉 — 山寺 — 何んでもみてやろうと巡検2日目、普段ならば学校があるときでも8時前に目がさめるのは珍しいといった面々が、5時ごろから飛び起きて山形の北東にある奇岩奇勝（凝灰岩・集塊岩の露頭だそうです）で名高い山寺をおとすれました。芭蕉の「しずけさや岩にしみ入る蟬の声」で有名な立石寺もこゝにある数多いお寺のうちの一つ、あいにくの雨で蟬の声は聞かれませんでした。早朝の山寺附近は静かで雨の音さえ岩にしみ込んでしまいそうでした。山寺の人はまだみんな寝ていたでしょう。とんでもないお寺は早起きです。参観料の10円ちゃんとはらわされました。

〈その3〉 — 象潟 — 芭蕉が「奥の細道」において「松島は笑うがごとく象潟はうらむがごとし寂しさに悲しみをくわえて地勢魂をなやますに似たり」と記した頃象潟にはマツの生えた小島が散在し水面には鳥海の山影が映っていたとのことですが、現在は田圃の中に小高い丘が散在するにすぎません。1804年この地を震源とする地震で一瞬のうちに陸化してしまったの

だそうです。

〈その4〉 — 車中 — 豪雨をすぎ秋田に向う車窓から水嵩を増した大きな川がみられました。酒田はとつくに過ぎたから最上川ではないし、何んという川だろうと皆乏しい知識をしぼっている折に、地図をみていたノ人が「汚物川じゃない」と口をはさみました。川は土砂をまじえて清流とは云い難いものでしたが汚物川という名はピッタリしません。どうしてこんな答が出てきたのかははじめのうちはわからなかったのですが「雄物川」の読みちがいとあって後で一同大笑いとなりました。

〈その5〉 — 秋田 — 人口20万の秋田市は東北一、二を争う文化都市ですが、秋田大の工藤先生のお話では市内にはまだ石おき屋根もみられ、建物も町の形態も古いものが非常に良く残された市だそうです。秋田着が夕方だったのと強い雨のために市内見学はあまり出来なかったのは残念でしたが、夕方の駅前の活気と国体までにと完成をいそいでいた駅改札口の改築などに近年工業などに近年工業都市化しつつあるといわれている秋田の一面をみるような気がしました。

地 理 研 に つ い て

地理研究会部員

地理研が産声をあげてから、はや3年目を迎えようとしている。才一年目は地理科の同好会形式であったが、二年目からは、正式にお茶大の自治会のサークルとして発足した。この一年間は、その意味では、新しい部の出発であったわけである。部員を地理科学生と限定せず、地理的物の考え方にとらわれずに、広く部活動を押し広げ、互に高めあおうとする意図であったが、正直の所、自治会から支給されるお金も魅力であった。門戸を開放するにあたって、地理研も大いにはりきって、一年生のオリエンテーションの時等ははずかしいながらも寸刻まで演じて、地理研のPRにこれ努めたが、結果は地理科でない一年生二名という有様であった。従って部員は三年生地理科教員、二年生地理科の殆んど、一年生史学科二名という非常にアンバランスな構成であった。ともかくも、5月中には、テーマも決まり、6月には現地に予備巡検に行き、合宿等大体の目安も決った。この間にも東大地文研との読書会が毎週一回行われ、多数の参加者を見たが、必ずしも地理的学習を目標にせず、他の社会科学に関心のある東大地文研と、まだ地理科同好会的気分